

藤原道信朝臣
明けぬれば夢見る
ものとは
知りながら
なほ恨めしき
朝ほらけかな



周防内侍
春の夜の
夢ばかりなる
手枕こ
かひなく立たむ
名こそ惜しけれ



和泉式部
あざざらむ
この世の外
思ひ出に
今一度の
逢ふ事もがな



謙徳公
哀れともいふべき
人は
思はずで
身のいたづらに
なりぬべきかな



殷富門院大輔
見せばやな
雄鷹のあまの
袖だにも
ぬれにぞぬれし
色は変はひりや



大中能宣朝臣
御垣守
衛士のたぐ火の
夜は燃え
層は消えつつ
物をこそ思へ



素性法師
今来むといひし
はかりに
長月の
有明の月を
待ち出づるかな



崇徳院
瀬を早み
岩にせかるる
海川の
われても末に
逢はむこそ思ふ



後鳥羽院
人も惜し
人も恨めし
味気なく
世を思ふ故に
物思ふ身は



権中納言定頼
朝ほらけ
宇治の川霧
絶え絶えに
あらはれ渡る
瀬々のあじろぎ



左京大夫道雅
今ほただ
思ひ絶えなむ
とはかりを
人づてならで
いふよしもがな



従二位家隆
風そよべ
奈良の小川の
夕暮れば
みそぎぞ夏の
しるしなりける



右大将道綱母
なげきつつ
独り寝る夜の
明へる間ば
いかに久しき
ものご方は知る



権中納言敦忠
後の心に
くらぶれば
昔は物を
思はきりけり



伊勢
難波がた
短き磯の
ふしの間も
逢はてこの世を
すくつてみよせ



皇嘉門院別当
難波江の
鷹のかり寝の
ひと夜ゆゑ
身を思ふは
恋ひわたるべき



中納言朝忠
逢ふ事の
絶えてしなくば
なかなかに
人をも身をも
恨みさらまし



中納言兼輔
みかの原わきて
添ふる
泉川
いつみきてか
恋しがるらむ



前大僧正慈円
おほけなく
浮世の民に
おほふかな
わがたつ袖に
墨染の袖



三条石大臣
名にしおはば
逢坂山の
さねかつら
人に知られて
くるよしもがな



オレンジ
百首むほえられる
かたじけなく